

8歳の夢を信じて…

ロンドンオリンピックに賭ける

トライアスリート (トーチンパートナーズ・チームケンズ)

井出樹里さん



写真提供：橋本明彦氏

今年にはロンドンオリンピックイヤー。前回の北京オリンピック、女子トライアスロンでアジア初の5位入賞を果たした井出樹里選手(28歳)は連続出場目指して、現在猛練習のまただだ中にある。新年も沖縄のチーム合宿地で迎えた。

トライアスロンは1974年アメリカで誕生した競技で、水泳(スイム)、自転車(バイク)、ランニング(ラン)を連続して行う。日本では30年前に鳥取県の皆生温泉で開催された大会が最初。2000年のシドニー五輪から正式種目となった。世界選手権や数多くの大会で採用されているのは、スイム1.5km、バイク40km、ラン10km計51.5kmで通称「オリンピック・ディスタンス」と呼ばれている。この51.5kmをコースによって差があるものの、女子のトップクラスで2時間前後というタイムを競うのだ。

井出さんが本格的にトライアスロンを始めたのは玉川大学卒業後だから、競技歴わずか2年半で五輪の舞

台に立ち、5位入賞という快挙を成し遂げた。その急成長が周囲を驚かせたが、この時「フィニッシュした瞬間、メダルに届かなかったことが悔しくてたまらなかった」という。

そんな思いは8歳の時にさかのぼる。生まれ育った世田谷のスイミングスクールで6歳から水泳を始め、8歳で育成クラスに昇格。この時「オリンピックで金メダルを取りたい」という強い思いが湧きだした。そんな幼い頃の夢の目標を、今も持ち続けているのが井出選手である。

高校2年の時、2000m自由形でインターハイに出場したものの、3年では出場できず、自分の力の限界を感じ引退。しかし「競泳で鍛えた心肺機能を生かせる」と玉川大学入学と同時に陸上部の門をたたき、それまで全くの未経験で入部した陸上部だったが、そこでも2年の秋には、全日本女子駅伝のメンバーに入るほどに。そして3年の夏に運命の出会いがあった。トーチンパートナーズ・チームケンズ監督の飯島健二郎氏がその人。トライアス



取材中はこの笑顔です。ガンバレ井出選手!

ロンの選手を連れて、玉川大学との合同練習に来ていた飯島監督に見初められたのだった。「トライアスロンで一緒にメダルを目指さないか」と。

「8才の時の夢がかなうチャンスがここにあるんだと、未経験の不安よりもワクワク感とうれしさがありません」と当時を思い出す井出さん。

トライアスロン一直線

トーチンパートナーズ・チームケンズは西東京市にあるA&A西東京スポーツセンター内が本拠地。このプールで、朝6000〜7000m泳ぎ込み、昼は飯能方面へバイクの練習へ。少ない日でも40km、多い日は100kmも山中を駆け回る。帰ると夕方は近くの小金井公園あたりを10〜20km走る。これが毎日の驚くべきトレーニングメニューだ。

トライアスロン転向後、スイムとランは高いレベルでの経験があったものの、バイクは初めて。苦手なコーナリングは休業日に公園の駐車場で練習し、8の字に置いたコーンの周りを1日中回っていたという。「他人より時間をかけないと、うまくならない、鈍くさいタイプ」と自認する井出さんにとって、誰よりも数多く練習をこなし、肉体を限界まで追い込むことのみが、世界レベルへの道だった。

昨秋、3度目の優勝を飾った日本

トライアスロン選手権をテレビで見た時、井出さんの競技姿は本当に強く逞しく、かつこよく、会うまではどんなアイコンウーマンだろう?と思っていた。が、目の前にいる井出さんは競技の人とは別人かと思わせるほど、小柄(身長158cm)で笑みを絶やさないチャーミングな女性。真正面を見て、どんなことにも真摯に、キラキラとした瞳で応えてくれる。こちらが圧倒されるくらいに。

週1回の休みの日はお風呂が好きなので、町の銭湯へ行くのが楽しみ。「スーパージョウのような人が混む所ではなく、ゆっくり落ち着いて入れる銭

湯がいいです。地元の『庚申湯』によく行きますがホッとします」

ロンドンへの道

町の片隅の銭湯で、心身を癒す井出さんは世界を舞台に活躍するアスリート。年に6回ほどは世界選手権シリーズ大会で海外に出る。1昨年から今年にかけては肉離れや疲労骨折など足の故障が続き、思うような成績を残せなかった。しかし昨年10月のメキシコ、ウワトゥルコワールドカップで優勝、また日本選手権での優勝と本来の実力が復活してきている。現在はロンドンオリンピック選考基準とな

る、4月、5月の世界選手権シリーズにすべての照準を合わせている。すでに上田藍選手の出場が内定しているので、シドニー、サンディエゴ、マドリッドで開催される大会の成績である2枠が決まるという厳しさだ。

けれども井出さんの目標はその先の8月4日のロンドン。キラキラの1等賞の表彰台である。どんな時でも背中を押してくれた母と自分だけの夢であった金メダル、その思いを今は周りのみんなが共有している。「鈍くさい自分をサポートしてくれ、ダメな時も自分を信じ続けてくれた人々の喜ぶ顔が見たい」と思う。

「最後は我慢くらべの競技だから、強い気持ちを持ち続けられれば身体は動くものです。コツコツやる競技は日本人向き、海外の大きい選手に勝つチャンスがあると思います」

なでしこジャパンだってそうだった。アメリカのあのワンバック選手に勝ったのだから。飯島監督が一番買っているのは、井出選手の「精神力の強さ」だという。夢は見るものではなく、叶えるものだということを実証してほしい。そして読者のみなさん、ぜひ地元の銭湯を愛する、井出選手の応援団になってください。

(西東京市在住)